



鏡池面影草履打

歌川景和画
一亭万在作

2378
292



遠 3 特
2378
292

一亭万丸作 全四册
歌川景和画 上之卷

鏡池面影草履打

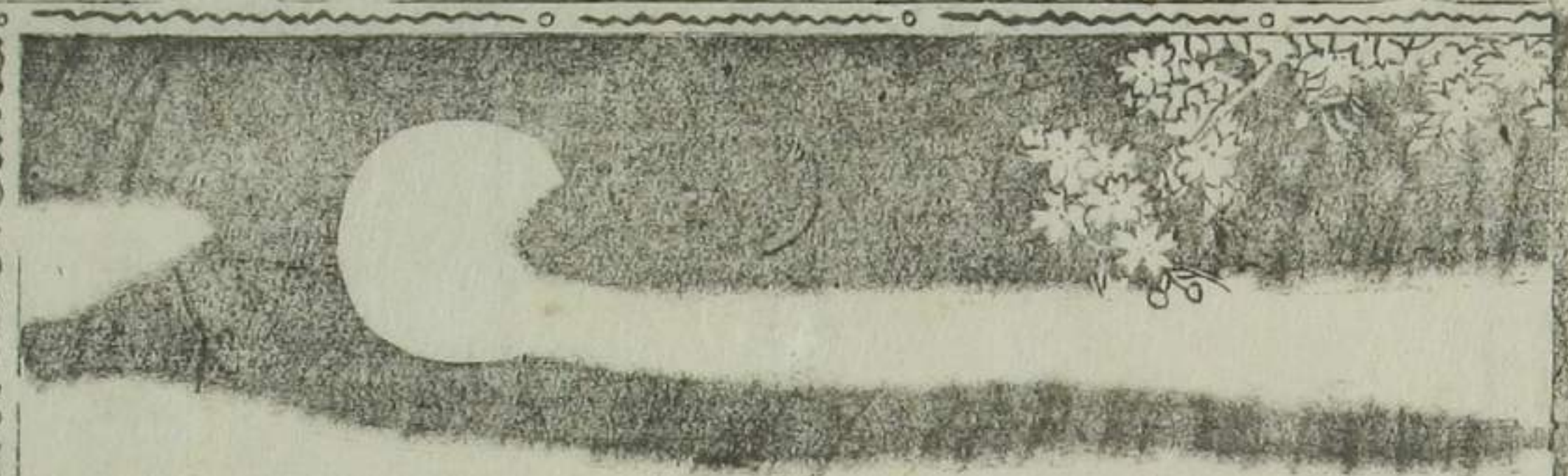
戊戌 孟春 葛屋吉藏板



梅の啼く鶯のホウ法華經の釋尊が方便品と説水住む蛙
の香片のやみ子房も再欺と返され生と生る物何れ屋敷の
なうりめやハ夫が中の中勸懲のう我の元木小喜怒哀苦愛悪怨と
継穂く兼るよ花を作者家ふるててこのか実の願ひ酸死と世相の
上も六側をわびてる妄語ゆて誠の下の横好の内政を難治の
痴問屋小七とるけられても心と辱とも思ひ陳文漢語の俗言
るねどとらうぬ肋の加味調合發散湯の高賣よりゆると小服る
知恵袋と絞下したる油汗福壽を量天下一鶴と龜と千代
万代輝く列女の鏡山年経るまふ曇りて磨死直してはちつを
合せ鏡が池水小俤写を草履打早々發市とかくの如し。

天保九年戊戌春 一亭万丸誌

草履打



鏡池の
草履の
おもうけ
水鏡
照る
鏡
花の
姿

全尾上か
婢女
於發



鏡山の
草履の
万代の
烈女の
鏡
色如
女乃
鏡草

隅田判官
春朝
岩藤
愛妻

Handwritten text on the left margin of the top page.



Vertical handwritten text on the bottom page, surrounding the illustration. The text is written in a cursive style.

Handwritten text on the right margin of the top page.



Vertical handwritten text on the bottom page, surrounding the illustration. The text is written in a cursive style.



三月のついでに
 四月のついでに
 五月のついでに
 六月のついでに
 七月のついでに
 八月のついでに
 九月のついでに
 十月のついでに
 十一月のついでに
 十二月のついでに
 春のついでに
 夏のついでに
 秋のついでに
 冬のついでに



下
 上

下
 上



葛城の秋



一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十



一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十



〇〇〇〇
 まうくのあや
 こけいなる
 かうとちふ
 まもれなる
 らまのけんを
 さうてあゆめて
 こまんとつぎ
 たてんとまうり
 久いあまういあけて
 どりまかり

〇やくそくごた
 こあういともくまかりの
 さのこまのまます
 られり子のいせんこのま
 せんごんさの
 あうごね
 なるまらさめと
 まうすりら
 〇〇〇〇

〇たのまう
 めいごま
 まらめ



〇まあくまうて
 こまんとせ山名
 まらまらこま
 りひこまこま
 こまらなる
 らまのけんを
 あれりいへうま
 せりまらあま
 あらめあひい

〇まらまら
 つまあま
 まらまら
 ちらまら
 当らあちどの
 つかまら
 かまら
 ありまら
 されまら
 かまら
 とうまら
 うまら
 こまら
 さまら

こまら
 まら
 らまら
 まら
 〇〇〇〇

まらまら

十七

